書評

ジョシュア・S・モストウ『みやびの幻想——伊勢物語と文化盗用の政治学』

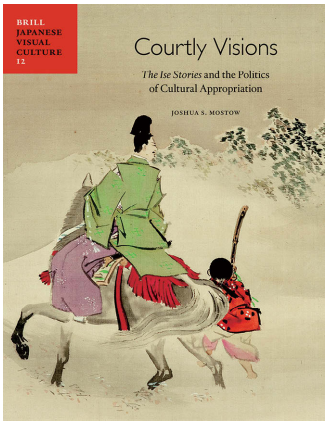
Joshua S. Mostow, *Courtly Visions: The Ise Stories and the Politics of Cultural Appropriation*

ロベルタ・ストリッポリ

『みやびの幻想』は、『伊勢物語』（一〇世紀作・英訳名では *The Ise Stories* または *The Tales of Ise* として知られる）がその成立の後、数世紀のあいだ様々な個人や団体によりどう再解釈・隠喩・利用されてきたのか、換言すれば、どのように視覚的に転用されてきたのかを見事に追究している。

光沢紙に美しく印刷された百七十一点の挿絵は、その大半が大判かつカラー印刷で、図書館や美術館、寺院、個人蔵などの様々な資料から成る。これらを収録した本書は、一個の作品としても抜きん出ている。テクストと挿絵の両方について広範囲かつ詳細な分析がなされており、美術史に精通する読者のみならず、日本の詩歌の専門家、そしてジェンダーや受容論など幅広い問題に関心のあるあらゆる層の読者をも対象としている。

これほどまでに豊かな著作を、（編集部注：英単語で）わずか一千語では到底評価し得ない。『みやびの幻想』は、日本文学史・美術史上最も広く受け入れられてきた作品のテクストと挿絵両方の、視覚的受容の実相を解き明かそうと試みている。その享受において『伊勢物語』と類比できる作品は、『源氏物語』と『平家物語』に限られる。『伊勢物語』は時に、本来想定していた享受者とは全く異なる絵師や読者たちにより視覚的に転用されてきた。それらの絵画化は、一体どこから生じ、我々はそれらをどう理解することができるのだろうか。それらの絵は、どのような鑑賞者に向けて『伊勢物語』から視覚的に転用されたのか。そして、それぞれの制作者が身を置く異なる環境において、それらの物語は、どう機能してきたのだろうか。



Brill, 2014

本書の中核を成すのは、著者による現存する中でも最古の『伊勢物語』絵巻三本の分析である。これらの原本は、同時代、すなわち十三世紀頃に出来たものとされている。だが、三本の絵巻（最初の二本は断簡、三本目は十八世紀の写本）が、いずれも著しく異なることから、当時すでに多形態の視覚的転用が充分な発達を遂げていたことがみてとれる。モストウは、そのうちの最初の一巻『白描伊勢物語絵巻』断簡を第二章で検討している。この絵巻の白黒の簡潔な図像からは、女性の登場人物たちの心情や、女性の鑑賞者の関心事に特別な注意が払われていることがわかる。男性を見つめる女性の眼差しや女性の性的欲望の視覚的表現、眉目秀麗で貴族的な洗練さを兼ね備える男性主人公の顔貌が見出され、男性の作者による『伊勢物語』が、ここでは女性の読者のために解釈しなおされているのだ。二巻目の和泉市久保惣記念美術館蔵『伊勢物語絵巻』（「久保惣本」とも称される）は、第四章で取り上げられている。きわめて装飾的で、プロの絵師により制作されたこの絵巻は、白描絵とは全く異なる様相を呈している。「極めて豪奢な様相、そして下絵の幾つかは明らかに奉納物としての機能を有することから、ある政治的主体により制作され、別のそのような主体に贈呈されるためにデザインされたという解釈が促される」（p. 127）とモストウは分析する。久保惣本は、『伊勢物語』が廷臣たちにより幕府に対するのみならず、その他の廷臣たちに対しても優位性を確立するための「文化資本の宝庫」として用いられていたことを示している。久保惣本の場合、持明院統の伏見天皇（一二六五―一三一七）を引き立てる役割を果たしていたのだ。三本目の絵巻『異本伊勢物語絵巻』は、第六章で検討されている。密教的な読みの可能性に結びつけられてきた異本であるが、モストウはこの解釈に異議を唱え、その理由としてこの絵巻が実のところ十三世紀のものではなく室町時代の絵巻であることを指摘し、従来の考察において見逃されることの多かった機知的でユーモアに富む挿画の特徴を挙げている。

本書で取り上げられている細部まで検討された興味深いテーマの中には、『隆房卿艶詞』（第三章・全訳は参考資料に収録）がある。『隆房卿艶詞』では、延臣・藤原隆房（一一四八―一二〇九）が寵愛し、『平家物語』にも登場する高倉天皇の後宮・小督を亡くした哀しみを表すため、『伊勢物語』の題材を視覚的に転用している。隆房は中でも『伊勢物語』の六五段で語られる在原業平、藤原高子、清和天皇の三角関係を用いて、己の心の内を表現するが、恋歌が詠まれた当時、小督と高倉天皇が存命で恋仲であったことを鑑みると、隆房の後宮に対する恋心の吐露は、奇妙なものに思えるかもしれない（宮廷がこの件を高倉天皇に対する冒涜と見做さない理由については、同章において興味深い説明がなされている）。

本書では、数多くの学説に異を唱えている。例えば第一章では、

一部の学者たちが主張する『伊勢物語』の和歌が絵画から生じたという説に反論している。第六章では前述の通り、『異本伊勢物語絵巻』は十三世紀に製作されたものでも、密教的な読みの実践に結び付けられたものでもない、との論を展開する。私見によれば、この本の最も魅力的な一章といえる第七章では、『嵯峨本伊勢物語』（一六〇八）が、すでに確立された標準的図柄（iconography）を反映したものではなく、むしろ新たな標準的図柄を作り出したことを論じている。この嵯峨本の広い流通が、江戸期以降の『伊勢物語』関連の文化生産に影響を与えたのだ。第八章では全く異なる『伊勢物語』の標準的図柄の生成、すなわち俵屋宗達（推定生没年・一六〇〇―一六三〇）とその工房、後に琳派とされたものたちによる制作に焦点を当てている。「これら二つの標準的図柄こそが、近代に至るまでの『伊勢物語』のイメージを占めているのだ」とモストウは述べ、「『嵯峨本伊勢物語』が版を重ね続けたことにより［…］近世の日本人一人ひとりの「文化リテラシー」を形作る確固たる要素となった」と結論づける。と同時に、「『伊勢物語』は、二〇世紀に入って日本でも国際的にも「典型的な日本」、日本美学の真髄として見做されるようになった琳派にとって、重要なトポス源としてあり続けた」と論じる（p. 241）。

『みやびの幻想』では、視覚的な転用や再解釈、そして正典化（canonization）にまつわる魅力的な旅が展開されており、専門分野にとっても重要かつ大きな影響を及ぼす労作である。著者の『伊勢物語』や日本の伝統詩歌、そしてその視覚表象の一挙一動を必然的に取り巻く複雑な事情に関する見事な知見は、賞賛に値する。

（翻訳：片岡真伊（東京大学東アジア藝文書院 特任研究員））

＊本稿は *Japan Review* 35（2020）に掲載された英文テキストの日本語訳である。